李白観瀑図の変貌

――李白はいつから酒に酔ったのか――

佐藤　悟

近年、見立絵についての研究が盛んになり、国文学の領域とも大きく関わっているようである。国文学研究資料館は『図説「見立」と「やつし」日本文化の表現技法』[注1]という報告書を出すまでに至っている。そこにおける浮世絵の見立ての理解は解釈の多様性を極限まで求めようとするものであるが、稿者は見立ては兼題に対する比喩表現という理解をしているので、普遍的な画題との関連で見立てを考えるべきだとする立場に立っている。本稿も「女鉢木」について論じた「紅摺絵と錦絵の間―パトロンの時代―」[注2]や「舟鷺図考―鈴木春信の花鳥画と画題―」[注3]、「『石投げ』の変貌」[注4]で示した稿者の立場を補強するものと考えて頂ければ幸いである。

【図1】は無款ではあるが、十八世紀中期に描かれた鈴木春信画の中判錦絵でボストン美術館その他に所蔵されている。ボストン美術館のホームページ[注5]によれば、この錦絵の画題は'Courtesan and Two Kamuro on a Spring Outing'（邦訳「遊女と禿　春の行楽」）とされている。ディヴィット・ウォーターハウス解題『浮世絵聚花　ボストン美術館補巻1（春信1）』[注6]にも同じ邦訳が与えられている。

遊郭に閉じこめられている遊女が禿二人を連れて行楽に出かけるというのは非現実的な画題である。春という季節の根拠は遊女が着ている桜花と流水の文様の裲襠によるものであろうが、背後に描かれた樹木は紅葉しており、春という季節にも疑問を抱かざるを得ない。

この錦絵を丹念に検討してみると、禿の一人は酒が入っ

【図1】鈴木春信「遊女と禿　春の行楽」（ボストン美術館蔵）。『浮世絵聚花　ボストン美術館　補巻1（春信1）』（小学館、1982年）所載

ていると思われる瓢箪を持ち、遊女はもう一人の禿の肩に手を掛けて体を支えているので、遊女が酩酊状態にあることが理解される。また背景の白い空間は上部が雲形によって切断され、縦の細かな筋が認められるので、高い滝を表現したものと考えることができる。

【図2】も鈴木春信画の中判錦絵で、平木浮世絵美術館等に所蔵されている。『青春の浮世絵師　鈴木春信―江戸のカラリスト登場』（注7）一一一図には「見立紅葉狩」という画題が与えられ、'Flirting at the Water fall!'という英訳が付されている。吉田洋子の解題によればこの図は謡曲「紅葉狩」の見立絵である。この画面は酔った若い男が滝の前で若い女の肩を借りなければ歩けないほどの酩酊状態になり、もう一人の若い女は男が脱ぎ捨てた羽織を肩に掛けて歩いている。また滝の前には紅葉が描かれ、滝の上部は雲形で切断されている。男の持つ扇子には「飛流直下三千尺」の文字が記され、吉田が指摘するようにこれは李白の七言律詩「望廬山瀑布　其二」の一節で、『聯珠詩格』等にも収められ、江戸人にとっては周知の詩であった。ここにも紅葉が描かれているのは同詩の「疑是銀河落九天」という句の「銀河」の秋というイメージによるものであろうか。

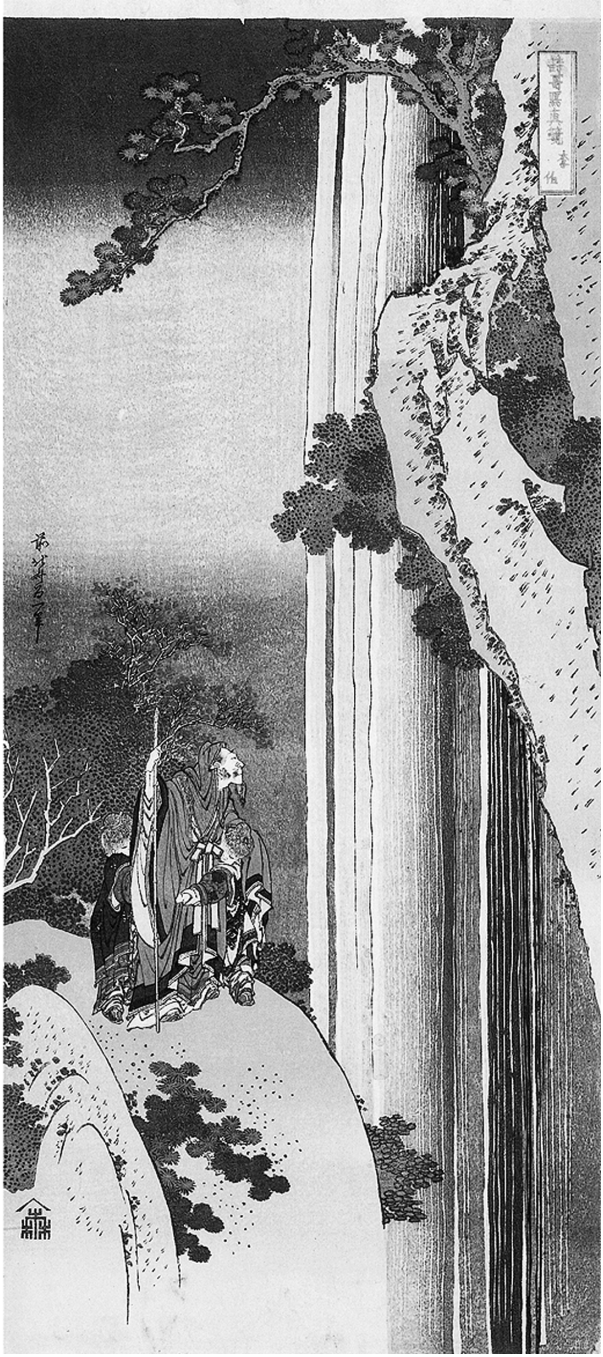
【図1】【図2】の画題の理解を助けてくれるのがボストン美術館に所蔵される磯田湖竜斎画の中判錦絵「風俗賢人

【図２】鈴木春信「見立紅葉狩」（平木浮世絵博物館蔵）。『青春の浮世絵師 鈴木春信ー江戸のカラリスト登場』（千葉市美術館、山口県立萩美術館・浦上記念館、2002年）所載。

略　李伯（りはく）」である。同図は上部を雲形に切られた滝の前で瓢箪を持った酩酊した女が若い男の肩に手を掛けているという構図である。画題の「略」は「やつし」と読むべきで、十九世紀には「見立」と表現されることが多い。したがって「風俗賢人略　李伯（りはく）」は「李白観瀑」という画題の見立絵ということができる。よって【図１】【図２】が李白を描いたものであることは明らかであろう。湖竜斎の作例を考えれば、【図２】を「紅葉狩」の見立てとすることにはかなり無理があり、鈴木重三『画題―説話・伝説・戯曲―』(注8)がいうように「李白観瀑」の見立てであろう。湖竜斎の図版は著作権法上引用できる図版を見いだせなかったので、ボストン美術館のホームページ(注9)をご参照願いたい。

【図３】はホノルル美術館等に所蔵される長大判の葛飾北斎画「詩歌写真鏡　李伯」で、天保初年の作品と考えられている。この作品は縦長の画面を活かして滝を描くことでその高さを表現している。李白は二人の童子に腰を抱かれているので、酩酊状態にあることが理解される。またやや紅葉した樹木も描かれる。この作品も【図１】【図２】の画題の伝統上にあると容易に理解される。

鈴木春信より古い作例としては、大英博物館に所蔵される天和四年（一六八四）に刊行された杉村治兵衛画『大和



【図３】葛飾北斎「詩歌写真鏡　李伯」（ホノルル美術館蔵）。ジャン・カルロ・カルツァ『北斎』（ファイドン株式会社、2005年所載）。

風流絵鑑』（山形屋市郎衛門板）の中の一図（【図4】）を挙げることができる。滝の前で酒に酔った若い男が遊女に支えられている。鈴木春信よりも八十年ほど早い作例で、この画題が江戸初期から浮世絵派の題材となったことが知られる。

「李白観瀑」という画題については田中一松「室町時代における観瀑図の系譜―惟肖得巌の李白観瀑図を中心として」[注10]が詳しい。田中はこの画題が十五世紀初期に成立したこと、芸阿弥、相阿弥らの阿弥派から狩野派へと連繋していったことを指摘している。

李白の詩に詠まれた滝がある廬山は現在の中国江西省九江市南部にあり、仏教や道教の聖地であり、世界遺産にも指定されている。そのような霊山であったため、廬山図は古くから描かれ、『歴代名画記』には六朝期の画家、顧愷之に「廬山会図」の作品があったと記されている。中国の画家にとって廬山図は重要な画題となった。日本にも東山御物として名高い玉澗筆「廬山図」（岡山県立美術館等蔵）[注11]が将来され、断簡となった今日でも高く評価されている。廬山は明代の画家沈周の「廬山高図」（台湾故宮博物院蔵）に見られるように、精神性の高い霊山として描かれている。いくら酒好きの李白であっても、酒を飲んで酩酊していられるような場所ではないのである。

【図4】杉村治兵衛『大和風流絵鑑』（大英博物館蔵）。『秘蔵浮世絵大観三大英博物館Ⅲ』（講談社、1988年）所載。

【図５】石涛「廬山観瀑図」（泉屋博古館蔵）。『泉屋博古：中国絵画』（泉屋博古館、1996年）所載。

中国には観瀑図の伝統があり、滝を眺める高士が描かれている。これらを高士観瀑図とも称するようである。描かれた高士は心を澄まして滝を眺め、鑑賞する側もそれと一体化していくのである。特に廬山における高士観瀑図は李白観瀑図とされ、南宋の馬遠の「李白観瀑団扇」（藤田美術館蔵）の作例があり、李白観瀑図は古くから存在していたことが知られる。その一例として清代の画家石涛の「廬山観瀑図」（泉屋博古館蔵）（【図5】）を見て頂きたい。ここに描かれた高士は李白と考えてよかろう。しかし酩酊していないのである。観瀑図の作例を中国絵画所在情報データベース（東京大学東洋文化研究所東アジア美術研究室）[注13]や『中國繪畫總合圖録』[注14]によって確認すると、飲酒している高士を描いたものが見あたらない。いったい李白観瀑図の李白はいつからどこで酒を飲み出したのであろうか。おそらく中国ではあるまい。

日本の室町期の李白観瀑図でも李白は飲酒しているとは思われない。そうなると日本の近世になって酒を飲み出したものと思われる。

【図6】は貞享五年（一六八八）の跋を有する『絵本宝鑑』（橘宗重著、長谷川等雲画、貫器堂重之刊）巻之二に描かれているものである。そこには次のような一文がある。

第十四　李大白

李太白は酒を好み詩を能せり。恒に沈酔して道路にて人に扶らる。瀧を見けるは廬山に有し時なり。飛瀧直下三千尺。　疑　是銀河落二九天一と。作れるも李白か作也。此瀧水上は雲霞に隠れたる体に描べし。又童子ありて李白か腰を抱立たるやうに描なり。時によるへし

ここにいう李白は酩酊状態であり、滝の上部を雲形等によって隠れた状態に描き、滝の高さを表現するような指示は、浮世絵作品の「李白観瀑」に通じるものがある。先行する肉筆作品があった筈だが未見である。おそらく狩野派系の狂画として描かれたのであろう。

【図7】は橘守国画『絵本直指宝』巻之二に「李太白見瀧之図」として収録されているものである。同書は延享二年（一七四五）に大坂の渋川清右衛門から刊行された半紙本九巻十冊の絵手本集で、柱には「写錦袋後編之続」とあるので、享保五年（一七二〇）刊『絵本写宝袋』、享保十四年刊『絵本通宝志』の続編という位置づけになる。そこには次のように記されている。

唐の李太白いとけなき時より才知人に勝れ長て詩文に名誉を顕はし玄宗皇帝の寵を得たり性酒を好みて飲事量なしよつて酔星の名あり今図する所は李白廬山の瀑布を見て詩を賦せし体なり或説に李白三十歳の

時名月の夜舟より水に没て卒すといへり此図に童子の腰を抱たるは老衰のゆへにあらず天下第一の高陽にて睡海棠とも見立らるゝ為人なれは毎々沈酒行なる体を画けるなり

飛流　直下三千尺
疑　是銀河　落二九天一

ここにおける李白も酩酊状態である。『絵本宝鑑』も『絵本直指宝』も狩野派の画題集というべきものであり、十七世紀の狩野派の一部では「李白観瀑」の李白は酩酊状態で描かれるようになったのであろう。李白には「醉李白」「李白醉帰図」ともいうべき画題があり、二つの画題が融合して新たな画題となったのであろう。

特に【図7】の李白は童子の肩に手を掛け、もう一人の童子が瓢箪をかつぐなど、【図1】の春信作品と似た構図である。これを見ても見立てには約束事があり、恣意的な解釈を許すものではなかったことが理解される。鍔などの金工作品に描かれた李白観瀑図には酒瓶とおぼしきものが脇に置かれたものもある。酒に醉った李白が滝を眺めるという構図は李白観瀑図を土台としながら、おそらく日本独自の画題として発展し、日本文化の中に根付き、我々の共通の財産となったのである。しかし日本の近代化の過程で多くの画題は忘れ去られ、見立てが謎解きを楽しむという

【図6】長谷川等雲『絵本宝鑑』（実践女子大学国文学科蔵）。

【図７】橘守国『絵本直指宝』（架蔵）。

ような誤解すら生じるようになったのであろう。失われた物語の復権の秋ではなかろうか。

注

1　八木書店、二〇〇八年刊。

2　『江戸文学』二一号（ぺりかん社、一九九九年一二月）pp.144–157

3　『実践国文学』第六二号（二〇〇二年一〇月）pp.104–108

4　『浮世絵芸術』百四十六号（国際浮世絵学会、二〇〇三年七月）pp.77–94

5　http://www.mfa.org/collections/object/courtesan-and-two-kamuro-on-a-spring-outing-226441

6　小学館、一九八二年刊。本図についてはほかに東京国立博物館、バン・フレック・コレクション、三井コレクションおよび別の日本個人蔵に所蔵されていることが指摘されている。

7　千葉市美術館、山口県立萩美術館・浦上記念館、二〇〇二年刊。一一一図。

8　『原色大百科事典』第四巻（大修館書店、一九八一年）。ただし鈴木は次のように記す。紅葉狩の酔客の背後に滝と見られるがむしろ滝見立ての時雨と見たい一面の降水を配し、酔客の持つ扇に「飛流直下三千尺」の字が記されている（p.142）。

9 http://www.mfa.org/collections/object/li-bai-rihaku-from-the-series-fashionable-parodies-of-the-sages-f-zoku-kenjin-ryaku-235906

10 『日本絵画史論集』（中央公論美術出版、一九六六年）pp.258-278。初出「得巌賛李白観瀑図について―室町時代観瀑図の系譜―」（『國華』七八六号、一九五七年九月）

11 米沢嘉圃「玉澗筆廬山図」（『米沢嘉圃美術史論集』下巻〈國華社、一九九四年〉所収）。初出『國華』六九一号、一九四九年十月。

12 米沢嘉圃「石濤筆　廬山図」（『米沢嘉圃美術史論集』下巻〈國華社、一九九四年〉所収）。初出『東洋美術』Ⅱ（朝日新聞社、一九六八年）。そこには次のような指摘がある。この図は、図上に石濤自身が、唐の詩人李白の廬虚舟に寄せた「廬山謡」を題していることからみて廬山を画いた図であることは明らかであるが、またその李白の詩に添えた題語のなかで「今（廬山における）昔遊を憶い、廬山謡をとりあげた」といい、制作動機を示唆している（p.303）。

13 http://cpdb.ioc.u-tokyo.ac.jp/index 2.html

14 鈴木敬編『中國繪畫總合圖録』全四巻（東京大学出版会、一九八二～三年）戸田禎佑・小川裕充編『中國繪畫總合圖録』続編全三巻（東京大学出版会、一九九九年）

（さとう　さとる・実践女子大学教授）